

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
 〒259-1293 平塚市土屋 2946
 神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
 TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

韓国のグローバル海運会社の韓進海運の破綻 —その1— The South Korean Hanjin shipping went bankrupt in 2017

李 貞和 (Lee, Jung-Haw)

2年前の世界コンテナ貨物船社7位に位置している韓進海運の破綻のニュースは、国内外の海運業界に衝撃を与えた。韓進海運の破綻は韓国国内の海運関連業者や海運研究者にショックと「なぜ、巨大な船社が破綻してしまったのか」という疑問を抱いた。私は2016年に韓進コンテナターミナルや港湾貨物を取り扱っているグローバル物流企業に訪問した。当時、インタビューのときも韓進海運の世界的なキャリアとしての活躍についてうかがったばかりだったので、驚きと同時に韓進海運で務めていた知人と見学先の担当者の方の笑顔が頭のなかで浮かんだ。

運事業に拡大してきた。韓進海運は、40年前(2017年に基準)韓進グループの創業者である故趙重勳(チョ・チュンフン)により設立された。

表1 韓進グループの歩み

年月	韓進グループの歩み
1945年11月	韓進商社設立
1946年	貿易・運送事業
1950年	朝鮮戦争が勃発、営業中断
1953年	営業再開
1958年	米軍輸送業者と国内代理店契約
1960年	航空事業開始 韓進観光(株)設立
1969年	輸送業界初のコンテナシステム導入 大韓航空公社を買収、大韓航空設立
1977年	韓進海運設立
1992年	売り上げ1兆ウォン達成
2003年	CKYH アライアンス結成 3男故趙スホ会長体制に
2006年	趙スホ会長逝く 夫人(崔ウニョン)が会長に就任
2013年	3年連続の赤字で、大韓航空から緊急資金支援
2014年	台湾グローバル船社・エバグリーン提携でCKYHE アライアンス結成 韓進グループ 趙ヤンホ会長、韓進海運買収
2016年4月21日	前崔ウニョン会長保有株全量売却
2016年4月25日	韓進海運の自律協約申請
2016年8月31日	法廷管理申請
2017年2月	法院破綻宣告



出所：雑誌『海洋韓国』vol.499,2015,4月号表紙
 「世界に進む韓進海運 (筆者の意識)」

グローバル船社である韓進海運の破綻に関連して様々な憶測がメディアや研究者からあった。しかし、2年も経った今もその理由がはっきり見えないのである。そこで、私は船社の研究者ではないが、韓進海運の破綻の切っ掛けに「韓進海運」の生い立ちや破綻にいたるまでのことが知りたくなり、韓進グループの歩みを調べてみることにした。

右記の表1と写真の通りのように、韓進グループは、草創期は港湾運送事業を中心に展開し、航空、海

(出所：mt.co.kr moneytoday, yonhapnews などの資料で筆者再作成)

韓進海運は、東アジアの域内のコンテナ貨物の伸展とともに2001年には、「世界フルコンテナ船運航船腹量」ランキング4位に位置付け、国内では1位になり、世界重要港湾に専用コンテナターミナルを所有・運営していた世界海運業界が認めていたグローバル船社であった。世界の屈指の船社である「韓



出所：韓進グループのホームページ
駐留米軍とベトナム軍需物資輸送契約の締結(前の人が故趙重勲会長)、

進海運」は、「なぜ、破綻してしまったのか、助ける道はなかったのか」については、次回の「国経研だより」で引き続いて述べたい。



出所：韓進グループのホームページ、韓進グループの最初の設立会社、韓進商社、1945年、11月

(所員ノリ・じょんは)

 2019年度国際経営研究所の活動について(続報) 

 研究活動(共同研究プロジェクト/新規2件)

-  企業の社会的責任の歴史的考察
代表者：大田 博樹
-  行動変容に向けたコミュニケーションデザインの研究
代表者：飯塚 重善

 客員研究員(50音順)

- <新規>
後藤 伸 (～2019.3.31 神奈川大学教授)
- <更新>
青田勝秀 (2015～国際経営研究所客員研究員)
大山俊介 (2014～国際経営研究所客員研究員)
萩原富夫 (2012～国際経営研究所客員研究員)
吉田 隆 (2012～国際経営研究所客員研究員)
平田沙織 (2016～国際経営研究所客員研究員)

 出版活動

-  国際経営フォーラムの刊行
『国際経営フォーラム』NO.30
特集テーマ：『令和時代の展望』
申込締切：6月28日、原稿締切：9月30日
※共同研究2年目については中間報告書の提出をお願いします。
-  Project Paper(共同研究成果報告書)の刊行

 公開講演会開催

-  2019年度第1回公開講演会
日時：2019年6月11日(火) 15:20-17:00
テーマ：新聞社の仕事とメディアの将来
講演者：朝日新聞社 論説委員 郷 富佐子氏

 広報活動

-  アクティビティを国際経営研究所HPで発信
<http://iibm.kanagawa-u.ac.jp/>
-  「国経研だより」で組織内外PR

 地域連携 平塚市との協働事業を推進

アサモア先生を偲ぶ会

【日時】2019年7月28日(日)

受付 12:00-13:00

第一部 13:00-14:00

第二部 14:30-16:30 (自由退席)

【場所】ホテル横浜キャメロットジャパン 4階

横浜市西区北幸 1-11-3

横浜駅西口より徒歩5分

【会費】10,000円

※ご香典・ご供花・ご供物は固く辞退申し上げます。

【連絡先】庶務課 (お早めにご連絡下さい)

(kushc-shomu@kanagawa-u.ac.jp)



高齢者の脚

韓 一栄

体力とは、人間の活動や生存の基礎となる身体的能力である

私が大学院生の時代に市と大学の協力による「高齢者健康づくり教室」が実施され、体力測定や週1回の運動プログラムのスタッフとしてお手伝いをさせた頂いた経験がある。参加者は、140人くらいで8:2の割合で女性の方が多く参加した教室であった。女性の参加者のほとんどは、自立した生活を送っていて自ら教室への参加に申請し、日常生活においてもウォーキングやジョギングなどを積極的に行っている方が多かった。一方、男性の参加者は、奥さんあるいは、子供さんから言われて参加された方が多くみられ、もはや参加申し込みの時点で積極性の男女差が表れた。

数少ない男性参加者のなかで私はAさんとBさんの2人の80歳の方と仲良くなり、話をする機会も増えてきた。しかし、2人の日常生活を聞いてみると驚くほど大きな差があることに気づいた。Aさんは、身の回りのことはほとんど自分で行き、車を使って奥さんと一緒に買い物をする。さらに、年に2回ほど旅行に出かける方であった。一方、Bさんは、人手を借りずに家のなかでの生活はできるが、買い物などは奥さんがやっていてBさん本人は、ほとんど外には出かけない方であった。体力測定の結果からみてもAさんは60歳前半並の体力であり、Bさんはかなり低い体力レベル(体力危険領域)であった。同じ80歳なのに生活範囲が大きく異なる。誰でも自分の将来図を描いたときにAさんのような生活範囲や体力水準を望むだろう。そこで、高齢者の自立した生活と体力について述べようと思った。

Point は、下肢筋力

体力のとらえ方は、行動、防衛、精神体力の3つ要因で大別できるが、ここでは行動の基礎となる身体的能力を意味するいわゆる行動体力について述べる。加齢と体力水準の変化をみると男女ともに6歳から加齢

にともなって向上し、男性は17歳頃、女子では14歳頃にピークに達した後、20歳以降では加齢にともなって穏やかに低下する傾向がある。行動体力項目のなかで最も注目してほしいのが下肢筋力である。

図に示したように加齢の影響は、上肢の筋量(図1)と比較して下肢の筋量(図2)の低下率が激しいことが分かる(筋量と筋力は比例する)。下肢筋力の低下は、歩幅(step length)や歩調(cadence)の低下原因の一つであり、最終的には歩行機能の低下や転倒要因にもつながる。また、高齢者が転倒により大腿骨を骨折し、入院した場合、2割の高齢者が寝たきりとなり死亡に至った研究結果がある。さらに、下肢筋力は、持久力と密接に関係しており、下肢筋力の低い人ほど持久力も低い。主に生存に関与するのが防衛体力であれば、活動に関与するのが行動体力である。高齢者が自立した生活を送ること、かつ生活範囲を広げるためには、若い時の行動体力のピークを上げることや下肢筋力を維持することが重要である。「今更難しいのではないか」と思う人も多くいるかも知れない。しかし、ほとんどの行動体力は、高齢者でも積極的な運動によって改善されることが多く、高齢者を対象とした筋力トレーニングの研究成果も多くみられる。

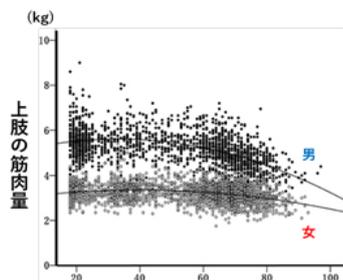


図1. 年齢に伴う上肢筋肉量の変化

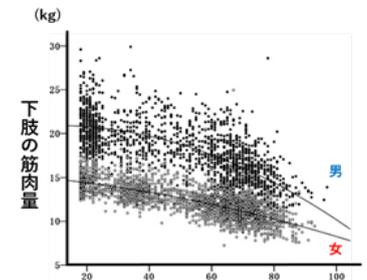


図2. 年齢に伴う下肢筋肉量の変化

日本人における筋肉量の加齢による特徴

日本老年医学会雑誌 Vol. 47 (2010), No.1 52-57

皆さん、そろそろ可愛い孫たちに元気で優しいおじいちゃん、おばあちゃんになれる準備をする時ではないでしょうか。

(所員／はん・いるよん)

ひらつかキャンパスにきて

知花 愛実

今年度から国際経営学部で一緒にお仕事をさせて頂いています知花愛実です。沖縄から上京し早3ヶ月経ちました。ようやく切符ではなく Suica を使っとうまく電車を乗りこなせるようになったと自負しています。沖縄は紅芋で一躍有名になった本島中部にある読谷村で生まれ育ち、その後大学時代を含め 15 年近くハワイに住んでいました。どちらにも電車がなく、のんびりとした島社会でした。そのような生活から一変、都会の生活に慣れるだろうかと少し緊張していました。しかし、ひらつかキャンパス近辺は自然豊かで海にも山にも近く、アットホームな雰囲気、沖縄やハワイとさほど変わらず、過ごしやすい感じがして気に入っています。そんなキャンパスがもうすぐ、横浜みなとみらいへ移転する予定と聞き、期待する一方で、既に少し寂しい気もします。

私が 2004 年に初めて単身ハワイに渡った際、ワイキキなどの有名観光地のあるオアフ島ではなく、カウアイ島に約 2 年間住んでいました。ガーデンアイランドと呼ばれるカウアイ島は自然豊かで、当時は開発もあまり進んでおらず、「若いのになぜカウアイに来たの!？」と地元の人たちに驚かれるほど「何もない」島でした。



沖縄でもハワイでも、自然や畑に囲まれた田舎暮らしでしたが、そこでの生活から得た視点や経験は、異文化理解にとっても活かされているし、自身の研究

や方法論などにも深く影響していると感じます。アメリカ合衆国という枠で見ると辺境にあるハワイ、そしてハワイ州のまた辺境のカウアイ島。そこには海を渡った人びとのローカルな出会いがありました



た。アメリカ本土からの移住者、100 年以上前に入植したポルトガル系、日系、沖縄系、中国系、フィリピン系移民らの子孫、先住民のネイティブハワイアン、比較的新しい移民の東南アジア、ミクロネシア諸島からの人々、「南の楽園」を求めて訪れる観光客、多種多様な人びとが混在する空間で、国籍、人種、民族、エスニシティに関わらず「ローカル」と自称し地元色を強め、コミュニティを作り出していく島の人びとがいました。

地方には地方の、島には島の視点があり、生活があります。私はこれまでの辺境生活を通して、都会や観光地にいるだけでは出会わない人びとと日々出会い、その生活者の立場からの知識や経験、問題意識を培うことができました。

私がひらつかキャンパスで過ごす期間はとても短いですが、その短い間でも平塚の魅力を多く発見し、学生らと分かち合うことができたと思います。

(所員/ちばな・めぐみ)

編集後記

第 62 号をお届けします。今号では、李先生と韓先生にエッセイを書いて頂きました。また、今年度ご着任された知花先生のフレッシュなエッセイを研究余滴に掲載しております。(Y)

研究余滴